



カトリック中央協議会  
CATHOLIC BISHOPS' CONFERENCE OF JAPAN

会 報

《2017年6月号(547号)》

目 次

報 告	
・ 常任司教委員会 .....	1
・ 教会行政法制委員会 .....	2
・ 新福音化委員会 .....	3
・ カリタスジャパン .....	3
・ 中央協議会事務局(総務) .....	5
公文書 .....	5

常任司教委員会

■4月定例常任司教委員会

日 時 2017年4月6日(木) 10:00-15:00

場 所 日本カトリック会館 会議室2

出席者 委 員 6人

事務局 7人

報 告

1. 高山右近列福式実行委員会の解散について

2017年2月7日(火)に大阪城ホールで開催された高山右近列福式の準備段階の経緯と実施状況および収支について、列聖推進委員会の大塚喜直司教と高山右近列福式実行委員会の神田 裕師より報告が行われた。本日をもって、高山右近列福式実行委員会は解散する。

2. FABC 中央委員会について

2017年3月7日-8日にタイのバンコクで開催された FABC 中央委員会に、日本カトリック司教協議会会

長の高見三明大司教の代理として参加した押川壽夫司教から報告書と資料が提出され、その概要を高見大司教が報告した。

3. ファティマの聖母出現 100 周年にあたっての駐日教皇大使からの要望について  
駐日教皇大使の勧めに従い、ファティマの聖母出現 100 周年にあたって同地を訪問する教皇フランシスコの平和の祈りに心を合わせて、日本の司教たちも祈ることを教皇に伝え、5 月 13 日に東京カテドラルで行うミサに合わせて、教皇にメッセージと祝福を願う書簡を高見大司教から教皇フランシスコあてに送付した。
4. 中央協議会口座の東日本大震災復興義援金残高について  
3 月 31 日現在の中央協議会口座の東日本大震災関連・義援金残高報告が行われた。義援金総額は 73,542,948 円、支出合計は、64,326,075 円、残高は 9,216,873 円となった。
5. 2017 年 4 月からのカトリック中央協議会新規採用者ならびに人事異動について  
カトリック中央協議会事務局の 2017 年 3 月 31 日までの退職者および 2017 年 4 月 1 日付の新規採用者、異動者が報告された。

## 審 議

1. FABC 東アジア家庭会議の参加について  
2017 年 5 月 15 日－19 日に台湾で開催される FABC 東アジア家庭会議への日本からの参加者と費用の支出部門を確定した。
2. 「日本・バチカン市国国交樹立 75 周年記念事業委員会」が企画する青少年向けの平和メッセージ作文コンクール（仮称）への後援依頼について  
日本・バチカン市国国交樹立 75 周年記念事業委員会が企画する「平和メッセージ作文コンクール」（仮称）に、日本カトリック学校教育委員会が後援者となることを承認した。
3. 育児・介護休業規程の改定について  
2017 年 1 月 1 日の「育児・介護休業法」の改正を受け、本常任司教委員会に提出された、カトリック中央協議会「育児・介護休業規程」の改定を承認した。
4. 中央協議会発行出版物の企画承認について  
出版審議会から提出された以下の書籍を中央協議会から発行することと出版企画書を承認した。  
書籍名 自発教令の形式による使徒的書簡 寛容な裁判官、主イエスー教会法典の婚姻無効訴訟の改正  
内 容 教皇フランシスコ自発教令 MITIS IUDEX DOMINUS IESUS の邦訳出版

## 教会行政法制委員会

### ■2017 年度第 2 回会議

日 時 2017 年 3 月 16 日（木）12：30－15：50  
場 所 日本カトリック会館 会議室 5  
出席者 6 人

## 審 議

1. 小冊子『寛容な裁判官、主イエス』発行について  
教皇フランシスコ自発教令“Mitis Iudex Dominus Iesus”の日本語訳を小冊子『寛容な裁判官、主イエス』として発行するにあたり、発行部数や頒布方法について検討した。
2. 『カトリック新教会法典』日本語訳の見直しについて  
『カトリック新教会法典』の日本語訳の見直し作業を行った。前回会合に引き続き、日本語訳が確定していない用語について、当委員会として推薦する日本語訳および修正点を検討した。

## 新福音化委員会

### ■2017年度第3回会議

日時 2017年4月6日(木) 15:30-17:30  
場所 日本カトリック会館 会議室4  
出席者 7人

#### 審議

「新福音化の集い」について

第1回福音宣教推進全国会議(NICE-1)開催から30年という節目である2017年に、日本の福音宣教における課題や体験を分かち合う「新福音化の集い(集い)」を開催する件について、2017年度定例司教総会に報告、3月の常任司教委員会に諮り、新福音化委員会主催で、2017年10月20日(金)から22日(日)に同集いを実施することが承認された。常任司教委員会の諸意見を受け、開催趣旨や具体的なスケジュールについて検討した。

次回日程 2017年6月2日(金) 13:00-15:00 日本カトリック会館

## カリタスジャパン

### ■第2回啓発部会会議

日時 2017年4月18日(火) 10:00-14:00  
場所 日本カトリック会館 会議室3  
出席者 12人

#### 報告

事務局より、2017年2月から4月までの事務局の活動内容についての報告ならびに2016年から2019年までのカリタスジャパン中期戦略計画とアクションプランの内容について報告した。

#### 審議

カリタスジャパン啓発部会の今後3年間の方向性(テーマ)と事業計画

- ・啓発部会の2017年から2019年までの3年間のテーマを「排除のない多様性社会をめざして」とする。
- ・2007年からの「自死と孤立」の取り組みから、人を孤立に追いやる不寛容で排他的な社会が浮き彫りとなった。それを受けて、今後3年間は、身近にある排除、多様性をキーワードに課題の共有と理解の促進を行い、排除のない多様性を認め合う社会の構築を考える機会となるような啓発活動を行う。
- ・3年間の事業計画としては、1年目はセミナーを開催し、分かち合いや分科会などで、課題の共有と声を拾う機会とする。まずは東京管区(札幌教区)と大阪管区(大阪教区)にて、映画「さとにきたらええやん」の上映と講演、その後分科会や分かち合いという形でセミナーを実施する。

次回日程 2017年6月20日(火) 10:00-14:00 日本カトリック会館

## ■第2回援助部会会議

日 時 2017年4月18日 (火) 14:00-17:20  
場 所 日本カトリック会館 会議室4  
出席者 10人

### 報 告

1. 海外会議・視察報告
  - (1) ミャンマー視察・パートナー会議 (2月8日-18日)
  - (2) カリタスアジア反人身取引に関するトレーニングとワークショップ (2月28日-3月3日、タイ・バンコク)
2. 国内災害対応
  - (1) 東日本大震災
    - ・各ベースの会計監査を実施した (2月)。カリタスアメリカより担当者が来日し会計モニタリングを行った (3月13日-17日)。
    - ・大規模災害対応のための体制構築とマニュアル作りを進めている。そのために、サポートセンターとベース立ち上げ振り返りワークショップを行った (2月24日、3月22日)。
  - (2) 熊本地震  
福岡教区の今後の活動の方向性をもとに支援を継続する。募金受付も継続する。
3. 援助実績報告

### 審 議

1. 以下の海外会議・視察を承認した。
  - (1) カリタスアジア総会・パートナーズフォーラム (6月12日-14日、タイ・バンコク)、リーダーシップトレーニング (6月15日-16日、タイ・バンコク)
  - (2) カリタスカンボジアパートナー会議・視察 (7月 日程未定)
  - (3) キルギスタン視察 (7月30日-8月5日前後)
  - (4) ウガンダ視察 (9月7日-16日)、アフリカパートナー会議 (9月21日、セネガル)
2. 東日本大震災復興支援活動2017年度予算を承認した。
3. カリタスジャパン戦略計画、アクションプランについて意見交換を行った。
4. 援助審査 国内3件、海外3件を審査、以下5件を承認、1件を次回会議へ付託とした。
  - (1) 共働学舎信州「除雪機購入による冬の生活援助」800,000円
  - (2) 日本カトリック障害者連絡協議会「障害を持つ信徒に関するアンケート実施」250,000円
  - (3) ルワンダ「孤児支援」6,176 USドル
  - (4) ヨルダン「女性移住労働者支援」10,000 USドル
  - (5) ヨルダン「イラク難民とヨルダン人困窮者支援」20,000 USドル
5. 国際カリタス緊急支援要請(Emergency Appeal/EA) 以下5件の支援を決定した。
  - (1) ソマリア「干ばつ緊急支援 (EA09/17)」10,000ユーロ
  - (2) シリア「アレッポ復興支援 (EA10/17)」20,000ユーロ
  - (3) ペルー「洪水・地滑り緊急支援 (EA11/17)」10,000 USドル
  - (4) 南スーダン「紛争・干ばつ緊急支援 (EA12/17)」10,000ユーロ
  - (5) ルワンダ「ブルンジ難民支援 (EA13/17)」10,000 USドル

次回日程 2017年6月20日 (火) 14:00-18:00 日本カトリック会館

## 中央協議会事務局

### ■総務

#### 6月会議予定

1日(木)	常任司教委員会	日本カトリック会館
2日(金)	カリタスジャパン委員会	//
13日(火)	難民移住移動者委員会船員司牧(AOS)全国担当者会議	//
20日(火)	カリタスジャパン啓発部会	//
20日(火)	カリタスジャパン援助部会	//
27日(火)	部落差別人権委員会事務局会議	//

### <会報 2017年6月号 公文書>

#### 2017年世界召命祈願の日 教皇メッセージ

第54回「世界召命祈願の日」教皇メッセージ  
「聖霊によって宣教へと駆り立てられて」

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

わたしたちはこの数年、キリスト者の召命の二つの側面について考えてきました。一つは主の声を聞くために「自分自身から出る」よう求める招きであり、他方は神の召し出しが生まれ、はぐくまれ、明らかにされる、恵みあふれる場である教会共同体の重要性です。

第54回「世界召命祈願の日」にあたり、わたしは今、「キリスト者の召命の宣教的側面」について考えたと思います。神の声に引き寄せられ、イエスに従う道を歩む人々は、宣教と愛の奉仕を通して兄弟姉妹に福音を伝えたいという、抑えられない願望を自らの内に容易に見いだします。すべてのキリスト者は福音宣教者とされています。キリストの弟子は実際、個人的な慰めとして神の愛のたまものを受けるのでも、自分だけを高めるよう招かれているのでも、経済的な利害に気を配るよう求められているのでもありません。ただひたすら神に愛されていることを喜び、その喜びによって変えられ、その体験を自分だけのものに留めておけないのです。「弟子たちの共同体の生活を満たす福音の喜びは、宣教の喜びです」(教皇フランシスコ、使徒的勧告『福音の喜び』21)。

このように宣教という使命は、キリスト者の生活に飾りのように付け加えられるものではなく、信仰そのものの核心です。主との結びつきには、みことばを告げる預言者として、また神の愛のあかし人として世界に派遣されることが伴います。

たとえ自分の弱さを痛感し失望していても、わたしたちは無力感に襲われたり、悲観主義に陥ったりせずに神を仰ぎ見るべきです。悲観主義は、わたしたちを単調で色あせた生活の消極的な傍観者にするだけです。恐れてはなりません。神ご自身がわたしたちの「汚れた唇」を清めに来られ、わたしたちを宣教にふさわしい者にしてください。「これがあなたの唇に触れたので、あなたのとがは取り去られ、罪はゆるされた。そのとき、わたしは主のみ声を聞いた。『だれを遣わすべきか。だれが我々に代わって行くだろうか。』わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください』」（イザヤ 6・6-8）。

すべての宣教する弟子は、「よいわざを行い、すべての人をいやした」（使徒言行録 10・38 参照）イエスと同じように、人々のもとに「出向く」よう招く神の声を心の中で聞きます。すべてのキリスト者は、洗礼の恵みによって兄弟姉妹に「キリストを運ぶ人」になると、わたしは前に述べたことがあります（一般謁見講話、2016年1月30日参照）。このことは、奉獻生活や司祭職に招かれ、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」と進んでこたえた人々にとりわけ当てはまります。彼らは、神のいつくしみが人々に豊かに注がれるために、宣教への新たな熱意をもって神殿の聖域から出るよう招かれています（聖香油のミサ説教、2016年3月24日参照）。教会が必要としているのは、真の宝を見つけたために穏やかで自信に満ちた心を持ち、喜びをもって皆にそれを伝えるために出かける聖職者です（マタイ 13・44 参照）。

キリスト教の宣教について語る際には、もちろん多くの疑問が生じます。「福音宣教者であることは何を意味するのでしょうか。福音を告げ知らせる力と勇気はだれから与えられるのでしょうか。宣教へと駆り立てる福音宣教の論拠は何でしょうか」。これらの疑問には、福音の中の次の三つの箇所について深く考えることによって答えることができます。すなわちイエスがナザレの会堂で宣教を始めた場面（ルカ 4・16-30 参照）、イエスが復活の後にエマオの弟子たちと共に歩んだ道のり（ルカ 24・13-35 参照）、そして最後に、種のたとえ話です（マルコ 4・26-27 参照）。

**イエスは聖霊によって油を注がれ、派遣されます。** 宣教する弟子であることは、キリストの使命に積極的に参与することを意味します。イエスのご自分の使命について、ナザレの会堂で次のように述べています。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ 4・18-19）。これはわたしたちの使命でもあります。すなわち「聖霊によって油を注がれ」、みことばを伝えるために「兄弟姉妹のもとに行き」、彼らのために救いの道具となるのです。

**イエスはわたしたちの歩みに寄り添っています。** 人々の心にわき上がる疑問や、現実から生じる課題を前にして、わたしたちは当惑し、自分には能力も希望もないと感じてしまいます。キリスト教の宣教は単なる非現実的な幻想であると考えたり、少なくとも自分の力の及ばないものであると思ったりするおそれがあります。しかし、エマオの弟子たちの傍らを歩く復活したイエス（ルカ 24・13-15 参照）のことを考えるとき、わたしたちは自信を取り戻します。この福音箇所には、みことばが告げられ、パンが割かれる場面に先立つ真正で独自の「道の典礼」があります。それは、わたしたちの一つひとつの歩みにイエスが寄り添っておられることを伝えています。この二人の弟子は、十字架刑に打ちのめされ、砕かれた希望と果たせなかった夢を心の中に抱きながら、挫折の道をたどって家に戻ります。彼らの中で、悲しみが福音の喜びに取って代わります。「イエスは何をなさるでしょう」。イエスは彼らを裁かず、彼らとともに歩みます。壁を築くのではなく、新たな突破口を開きます。イエスは彼らの失意を少しずつ変えてゆき、彼らの心を燃え立たせ、そしてみことばを告げ、パンを割くことによって彼らの目を開きます。このように、キリスト者は宣教の使命を独りで担うではありません。キリスト者とは、たとえ疲れ果て、人々の理解が得られなくても、「イエスがともに歩み、ともに語らい、ともに呼吸し、ともに働いてくださることを知る者です。宣教活動のただ中では、イエスがともに生きてくださっていることが感じられます」（使徒的勧告『福音の喜び』266）。

イエスは種を育てます。最後に、宣教するすべを福音から学ぶことが重要です。わたしたちはしばしば、たとえ悪気はなくとも、ある種の権力欲や改宗の強要、偏狭な狂信主義にとらわれます。しかし福音は、成功と権力の偶像化、組織への過剰なこだわり、さらには奉仕より征服を優先しようとする考え方を退けるようわたしたちを招いています。神の国の種は、たとえ目に見えないほど小さく、時には取るに足らないものに思えても、神の絶え間ない働きによって徐々に成長し続けます。「神の国は次のようなものである。人が土に種をまいて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」(マルコ 4・26-27)。神はわたしたちの想像を超えたかたであり、つねに広い心でわたしたちを驚かせてくださいます。神はわたしたちの働きに、人間の打算をはるかに超えた実りをお与えになります。これこそが、わたしたちにとってもっとも大切な信頼です。

わたしたちは福音に基づくこの信頼をもって、宣教の根本である聖霊の静かなわざを受け入れます。絶えず観想的な祈りをささげなければ、司祭職への召命もキリスト教の宣教もありえません。したがってキリスト者の生活は、みことばに耳を傾け、とりわけ聖体礼拝において主との個人的な交わりを深めることによって育まれなければなりません。聖体礼拝は、わたしたちが神と出会う特別な「場」です。

わたしは、とりわけ司祭職と奉獻生活への新たな召命を神に願い求めるためにも、主とのこの深い友情を生きるよう皆さんを強く励まします。神の民は、福音のために生涯をささげる司祭に導かれる必要があります。したがってわたしは、小教区共同体、教会内の諸団体と多くの祈りの会に対し、くじけずに主に祈り続けるよう求めます。主が収穫のために働き手を送ってくださいますように。また、福音を愛し、兄弟姉妹に寄り添い、神のいつくしみ深い愛の生きたしるしとなることのできる司祭を、主がわたしたちに与えてくださいますように。

兄弟姉妹の皆さん、とりわけ若者に対してキリストに従うよう説き、提案する情熱を、わたしたちは今も取り戻すことができます。信仰を退屈なもの、単なる「果たすべき義務」ととらえる世論の中で、わたしたちキリスト者の若者は、イエスの姿に絶えず魅了され、イエスのことばと行いによって問いかけられ、駆り立てられることを望んでいます。そして彼らは愛のうちに喜んで自らをささげ、主によって人間的に充実した生活を送るという夢を抱いています。

救い主の母、至聖なるマリアは、自らの若さと情熱をみ手にゆだね、神に対して同じ夢を抱く勇気をもっておられました。マリアの取り次ぎによって、マリアのように開かれた心、主の呼びかけに「はい。わたしはここにおります」と答える心構え、そして全世界に主を告げ知らせるためにマリアのように出向く(ルカ 1・39 参照) 喜びがわたしたちに与えられますように。

バチカンにて  
2016年11月27日  
待降節第一主日  
フランシスコ

第51回「世界広報の日」教皇メッセージ

「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」(イザヤ 43・5)  
「現代に希望と信頼を伝える」

テクノロジーの進歩によるメディアの普及により、非常に多くの人々が情報を即座に共有し、その情報を世界の隅々にまで伝えることができるようになりました。それらの情報は良いものにも悪いものにも、また真実のものにも偽りのものにもなりえます。わたしたちの教父は、水力で絶え間なく動く水車の石うすに人間の頭脳をととえました。しかし小麦をひくか、毒麦をひくかを決めるのは、水車小屋のあるじです。人間の頭脳は絶え間なく働いており、受けたものを「ひく」のを止めることはできません。しかし何を与えるのかを決めるのはわたしたちです(聖ヨハネス・カッシアヌス「レオンティウスへの手紙」参照)。

コミュニケーションの裏から栄養を得ている人々に柔らかく良質なパンを提供するために、専門職や個人的な交わりを通して、大量の情報を日々、「ひいている」皆さんに、わたしはこのメッセージを伝え、励ましたいと思います。他者に対して先入観を抱かずに、出会いの文化を育むことにより、確かな信頼をもって現実に目を向けられるよう助ける、建設的なコミュニケーションをわたしは皆さんに強く勧めます。

わたしたちは不安の悪循環を断ち切り、「悪いニュース」(戦争、テロ、スキャンダル、人間によるあらゆる過ち)に焦点を当てる風習によって生じる恐怖の連鎖を止めるべきだと、わたしは確信しています。もちろんそれは、苦しみに満ちた悲しい出来事を無視するような誤った情報を広めることとも、悪事に目をつむる単純な楽天主義に傾倒することとも違います。そうではなく、わたしは不満とあきらめという感情を克服するよう皆さんに求めます。そうした感情は無関心と恐怖を生み出し、悪は阻止できないという考えをもたらします。その上、マスコミ業界では、良いニュースはあまり注目されないが、痛ましい悲劇や不可思議な悪行は容易に脚光を浴びるといった認識が蔓延しています。そこには良心を麻痺させ、人々を悲観的にさせようとする誘惑が存在しています。

したがってわたしは、建設的で開かれたコミュニケーション手段の追求に貢献したいと思います。それは悪に主役を与えるのではなく、情報を受けた人々が積極的で責任ある行動を起こせるよう促しながら、実現可能な解決策を示すために尽くすコミュニケーション手段です。わたしは「良い知らせ」の論理に基づく情報を現代の人々に伝えるよう皆さんに求めます。

### 良い知らせ

人生は出来事が整然と連ねられた単なる年代記ではなく、語られることを待ち望む一つの歴史です。それを語る際には、もっとも重要なものを選んで集めることのできる、解釈の鍵となるものを選ぶ必要があります。現実そのものの意味はただ一つではありません。すべてのものが、どのように物事を見るかによって、すなわち物事を見る際に用いる「レンズ」によって変わります。そのレンズを変えれば、現実も違って見えます。それでは、適切な「レンズ」を用いて現実を読み解くにはどうしたらよいのでしょうか。

現実を読み解くためにわたしたちキリスト者が用いるレンズは、至高の「良い知らせ」である「神の子イエス・キリストの福音」(マルコ 1・1)からもたらされる良い知らせにほかなりません。聖マルコは冒頭にこのことばを記してから、イエスに関する「良い知らせ」を伝え始めます。それはイエスに関する情報以上のもの、すなわち「イエスご自身という良い知らせ」です。実際、福音書を読み進めると、この名称が内容



にふさわしいこと、そして何よりも、その内容がイエスご自身であることが分かります。

イエスご自身であるこの良い知らせが良いのは、苦しみを免れるからではなく、苦しみを神と人々へのイエスの愛の一部として、より広い観点から捉えているからです。神はキリストのうちに、人間のあらゆる状態に連帯し、わたしたちは独りではないことを明らかにしてください。神は決してご自分の子どもを忘れないからです。「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」(イザヤ 43・5)。これは、ご自分の民の歴史につねにかかわっておられる神の慰めのことばです。神は「わたしはあなたと共にいる」と約束し、最愛の御子のうちに人間としての死を受け入れるほどに、わたしたちのあらゆる弱さを引き受けてください。キリストのうちにあれば、暗闇と死さえも光といのちに出会う場になります。人生の中で失敗に苦しむ場こそが、すべての人に届く希望が生まれる場所です。希望は決してわたしたちを欺きません。神の愛がわたしたちの心に注がれ(ローマ 5・5 参照)、埋められた種から草木が育つように、新しいいのちを芽生えさせるからです。このように考えると、世界の歴史に起きているあらゆる新しい悲劇は、これから起こりうる良い知らせの舞台にもなります。愛はつねに寄り添うすべを見いだし、思いやりのある心、くじけない顔、作り出すことのできる手を奮い立たせるからです。

### み国の種への信頼

イエスはたとえ話をういて、福音に基づく考え方へと弟子たちと群衆を導き、愛は死んで復活するという教を学ぶのに適した「レンズ」を与えています。イエスはたびたび、地に落ちて死んでではじめてその生命力を発揮する種にみ国をたとえます(マルコ 4・1-34 参照)。み国の秘めた力を伝えるために比喩やたとえ話をういる方法は、重要性や緊急性を損なうものではなく、聴衆がそのことを受け入れ、自分自身に当てはめるための自由な「余白」を残す、いつくしみ深い方法です。それはまた、過越の神秘のはかりしれない尊厳を表すために、とりわけ適した方法でもあります。キリストにおける新たないのちの逆説的な美を伝えるために——理念よりも——イメージに訴えているのです。その新たないのちにおいては、敵意と十字架は神の救いを阻むものではなく成就させるものであり、弱さは人間のあらゆる力よりも強く、失敗は愛のうちにすべてを最高の形で成し遂げる前の前奏曲です。「人が土に種をまいて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長する」(マルコ 4・26-27)。み国への希望は、まさにこのように熟し、深まります。

み国は、表面からは見えなくとも静かに根をはる種のように、すでにわたしたちの中にあります。聖霊によって視覚を研ぎ澄まされた人々には、み国が芽吹いているのが見えます。彼らは至るところに生えている毒麦によってみ国の喜びが奪われないようにします。

### 聖霊の地平

イエスご自身である福音に根ざした希望は、わたしたちが目を見て、主の昇天の祭日の典礼祭儀において主を観想するよう促しています。たとえ主がわたしたちから遠ざかっていくように思えても、実際には希望の地平はさらに広がっています。一人ひとりの人間は、人類を天に上げてくださるキリストのうちに、完全な自由をもって「イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです」(ヘブライ 10・19-20)。「聖霊の力」によってわたしたちは、人類があがなわれ、新しくされたことを、「地の果てに至るまで」(使徒言行録 1・7-8 参照) 伝える「あかし人」になることができます。

み国の種と復活の教に信頼を置くことは、コミュニケーション手段の形成にもつながります。その信頼のおかげでわたしたちは、あらゆる出来事や一人ひとりの顔の中に良い知らせを見いだし、それらに光を当てることは可能であるという確信のもとに、——現代のあらゆるコミュニケーション手段を用いて——活動することができるのです。

信仰をもって聖霊の導きに身をゆだねる人は、いかに神がこの世界の劇的な状況の中で救いの歴史を織りなしておられるかを、神と人間の間で起きているあらゆる出来事の中に認識し、識別することができます。希望はこの聖なる歴史が織りなす糸であり、織り手は慰め主である聖霊にほかなりません。希望はもともとへりくだった徳です。それは、生活の奥底に埋もれていてもパン生地全体を膨らませるパン種のようなものだからです。わたしたちは福音を読み直すことによって希望を育みます。この世における神の愛の写しである諸聖人の生涯において、福音は何度も「増刷されて」きました。聖霊は今も、多くの活発な「媒体」を通してみ国への願いという種をわたしたちの中にまき続けています。それは歴史の出来事の中で福音の導きに身をゆだね、この世の闇の中の灯台のように道を照らし、信頼と希望の新しい道を切り開いている人々の働きを通してなされるのです。

バチカンにて  
2017年1月24日  
フランシスコ

カトリック中央協議会 「会報」 2017年6月号 (通巻547号)

発行日 2017年5月20日

発行 宗教法人カトリック中央協議会 <http://www.cbcj.catholic.jp>

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 電話 03-5632-4411 Fax 03-5632-4457